

東京大学工学部 学生員 島崎武雄

1. 浅草外島

古代の利根川は現在の古利根川の流路を流れ、荒川・入間川を合せ、下流は隅田川となつて奥東京湾に注いでいた。¹⁾ 浅草付近が隅田川の河口であつた。古代から近世にかけて、隅田川西岸に、浅草寺を中心として橋場から鳥越にいたる長さ約8Km、幅約300mの島状の台地が形成されていた。これを浅草外島と称する。²⁾ 古代から中世にかけての江戸城周辺の想像図を図-1に示す。

元和6年(1620年)、日本堤の築造にあつて待乳山の一部が削られ、同年、蔵前の米蔵建設にあつて鳥越小山が削られた。³⁾ 正保2年(1645年)、両国南の矢の倉の米蔵建設にあつても鳥越小山の土が用いられた。²⁾ このため、今日、台地状に残っているのは、写真-1に示すように、聖天宮を祀る待乳山のみである。菊池によれば、待乳山はロームによつて被覆されている。²⁾ 待乳山は古くより真土山とも書かれること、江戸時代から土取場とされていたことを考え合わせると、浅草外島は関東ロームの洪積台地であつたと推定される。

2. 浅草寺の起源

『武蔵国浅草寺縁起』は次のように記している。

「むかし武蔵国宮戸河の辺に兄弟の漁父有。名付て檜熊の浜成竹成といふ。則磯辺に出て浦わにさすらい世を渡るよすがとなんしけり。推古天皇三十六戊子年三月十八日癸丑。碧落に雲きへて蒼溟に風しづかなる朝。江戸浦にて釣をたれ網を引業をなしけるに、おぼえず観音の像のみ網にかゝり給ひて。いと更に遊漁の類は釣をもしづめざりけり。爰にあまのたぐ繩くり返し。又こと浦に浦づとふいへども。七浦の浦ごとにさながらおなじさまなる仏像のみかゝり給へり。」⁴⁾

推古36年(628年)3月18日、隅田川沿岸の漁師であつた檜熊の浜成・竹成という兄弟が江戸浦から観音像をすくい上げて祀つた。これが浅草寺の起源であり、大化1年(645年)には、勝海上人が開山となつて堂宇を営んだとしている。昭和20年(1945年)3月10日、浅草寺が戦災に会い、五重塔付近の大公孫樹も焼けたため、その根を掘り起したところ、土中から白鳳時代の瓦や同開珎の銅銭が発見されたので、浅草寺縁起が妄誕でないことが証明された。⁵⁾ 大化の改新ころには浅草寺の堂宇が存在していたと推定される。

3. 檜熊牧と浮嶋牧

『延喜式』兵部省の諸国馬牛牧には諸国の馬牛の官牧の名が挙げられているが、武蔵国の条には「檜前馬牧」、下総国の条には「浮嶋牛牧」が挙げられている。⁶⁾ 奈良時代において、檜前馬牧は隅田川の西岸、浅草・鳥越付近にあつた官営の牧場であり、浮嶋牛牧は隅田川の東岸、寺島・須崎・小梅・押上付近にあつた官営の牧場である。⁷⁾

4. 豊嶋駅

律令国家が成立した当初、武蔵国は東山道に属していた。しかし、開発の進展とともに、東海道へ移行しようとする趨勢を示し始める。『続日本紀』神護景雲2年(768年)3月、東海道巡察使式部大輔従五位下紀朝臣広名等の奏上に、

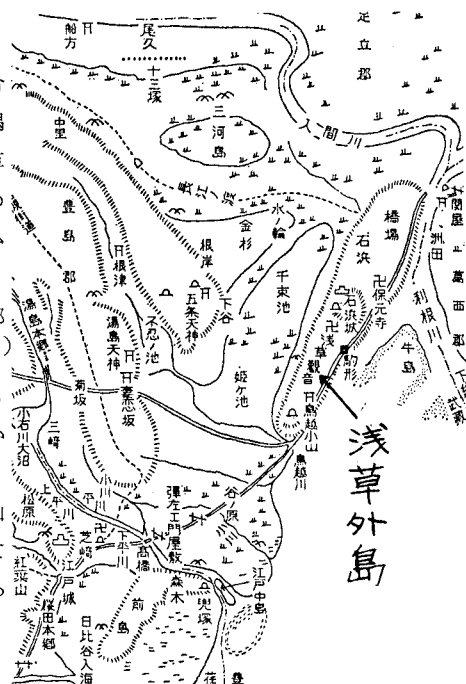


図-1. 五百年以前江戸城下図 2)

「下総国井上。浮嶋、河曲の三駅、武蔵国乗~~瀬~~、豊嶋の二駅、山海兩路を承け、使命繁多なり、乞う中路に准じて、馬十匹を置ん。奉勅依奏。」

とあり、武蔵国の乗~~瀬~~・豊嶋の2駅が東山道と東海道の両方の旅客を受け始めていることを示している。3年後の宝亀3年(771年)10月には、武蔵国は東山道から東海道へ所属が変更されることとなり、乗~~瀬~~・豊嶋の2駅は東海道の旅客のみを受けることとなつた。⁸⁾

『延喜式』兵部省の諸国駅伝馬の条に

「武蔵国駅馬 店屋。小高。大井。豊嶋各十疋。

伝馬 都筑。橘樹。荏原。豊嶋郡各五疋。」

とあり、平安時代初期においても、武蔵国に豊嶋駅など4駅が認められるが、乗~~瀬~~駅は廃止されたようである。⁶⁾ 豊嶋駅の所在地については、北区(中里・王子・豊島)・台東区(浅草花川戸)・千代田区(神田・平川・江戸城辺)の諸説がある。⁹⁾ 菊池は、北区は遼遠の卑地であり、著名人の通過記録がないことを主理由として北区説を否定し、千代田区は荏原郡桜田郷内であり、豊嶋駅家郷と重なるはずはないとして千代田区説を否定し、浅草外島の花川戸を豊嶋駅の地と擬定している。その理由として、『江戸名所図会』の記述、在原業平・更級女ら著名人の通過記録があること、豊嶋の名の起源は浅草外島に始まるであろうことを挙げている。²⁾

5. 豊嶋駅と隅田川の渡河点

駅馬・伝馬制のうち、船のみを備えた水駅は全国で越後国渡戸駅のみである。⁹⁾ しかし、云うまでもなく、東海道を武蔵国から下総国へ行くには隅田川を渡らなければならないのであるから、遅くとも、武蔵国が東山道から東海道へ所属変更になつた宝亀2年(771年)10月以降、隅田川に官道の渡河点が設けられたはずである。承和2年(835年)6月29日の太政官符によれば、渡船16艘を加増することとし、隅田川については、

「~~低瀬~~・~~総国~~・~~井上~~・~~浮嶋~~・~~河曲~~・~~三駅~~・~~武蔵~~・~~乗~~・~~瀬~~・~~豊嶋~~・~~二駅~~・~~山海~~・~~兩路~~・~~承~~・~~け~~・~~使命~~・~~繁多~~・~~なり~~・~~乞~~・~~う~~・~~中~~・~~路~~・~~に~~・~~准~~・~~じ~~・~~て~~・~~馬~~・~~十~~・~~匹~~・~~を~~・~~置~~・~~ん~~・~~奉~~・~~勅~~・~~依~~・~~奏~~。」

とあり、隅田川は川幅が広く、架橋が不可能なので、2艘の渡船を4艘に増すことを命じている。¹⁰⁾ このころ、隅田川を渡る人馬の交通が殷賑をきわめていたことを物語っている。豊嶋駅をどこに比定するにしても、豊嶋駅を水駅とすることはできないが、いずれにしても、水駅に近い状態の渡河点が豊嶋駅の延長として設けられていた。隅田川の渡河点が浅草外島の隅田川沿岸の橋場・石浜周辺に設けられていたことは疑いないので豊嶋の所在地を浅草外島に比定すれば、豊嶋駅の中に渡河点が含まれていたことになるが、渡船の重要さと困難さを考えると、むしろ渡河点そのものに豊嶋駅の実質が置かれていたことになる。滝川は、さらに歩を進めて、現在の白鬚橋の袂を奈良平安時代の東海道の渡河点であるとしている。⁷⁾

6. 律令時代の浅草外島の集落

浅草寺伝法院には古墳から出土したと推定される石棺があり、鳥越神社にも鳥越小山の古墳から出土したと推定される高坏・勾玉などが保存されている。²⁾⁵⁾ このほか、浅草寺境内の弁天山・橋場の妙亀塚が円墳であり、待乳山の頂上に前方後円墳が存在したとする説もある。¹¹⁾

これらの古墳は、浅草外島に古代初期から集落が発達していたことを示す。律令時代に入ると、さらに開発が進んだ。隅田川をはさみ、足立区の毛長堀と綾瀬川に挟まれた地域、荒川区の尾久・荒川から台東区浅草にいたる地域に広大な条里制遺構が残されている。足立区内の陸羽街道を延長すると浅草寺本堂に到達することが指摘されている。¹²⁾ 条里制遺構の存在は、この地域が律令時代の土地開発の中心であつたことを示している。律令時代における浅草外島の浅草寺を中心とする集落は、武蔵国府と下総国府の中間に位置し、農村・



写真-1 待乳山聖天宮(1974.1.15撮影)

7. 石浜溱

安房国から再起した源頼朝は、治承4年（1180年）10月2日、太井川・隅田川を渡つて武蔵国に入った。『吾妻鑑』は次のように記している。¹⁴⁾

「治承四年十月二日辛巳。武衡相、乘王常胤、公常等之舟楫。济大井、陂田、西河。精兵及三万余骑。赴武藏国。」

とあり、江戸太郎の知行所であつた石浜湊に西国船が数千艘も入港していたことを記している。¹⁵⁾

『夫木和歌抄』にある康元1年(1256年)の藤原光俊の和歌「いほさきの墨田河原に日は暮れぬせ
きやの里に宿やからまし」の註に、

「此歌は家集に云康元元年九日鹿島社に詣でけるにすみだ河のわたりにて此のわたしのかみのかたに河のかたにつきて里のあるをたづぬればせきやのさとと申すまへには海ふねもおほくとまりたりと云々」とあり、石浜湊に多数の海船が停泊している情景を記している。¹⁶⁾ 多数の西国船が入港していることは、瀬戸内海との西廻りの航路が開け、交易が日常化していたことを示している。このような石浜湊の繁栄も、中世に入つて始まつたわけではなく、古代から賑わいを見せていたのであろう。漁港・渡船場にとどまらず、海路による西国の物資と内陸水路による武蔵国内部からの物資が集散し、交易が行われる場として石浜湊が古代より存在していたと推定される。この石浜湊こそが今日の東京港の出发点である。

〔参考文献〕 1) 吉田東伍：『利根治水論考』，1910・12.1. 2) 菊池山哉：『東国の歴史と史跡』，1967.5.10. 3) 東京都浅草区：『浅草区誌 上巻』，1914.2.28. 4) 『武蔵国浅草寺縁起』，応永年間，「続群書類従 27輯下」に所収。5) 東京都台東区役所：『台東区史 沿革編』，1966.3.31. 6) 藤原時平・藤原忠平ら：『延喜式』，延長5(927)，「新訂増補国史大系」に所収。7) 滝川政次郎：「律令時代の隅田川界」，政経論叢，3-4，1955.3.15. 8) 『続日本紀』，「新訂増補国史大系 第2巻」。9) 田名網宏：『古代の交通』，1969.11.1. 10) 『類聚三代格』，「新訂増補国史大系 第25巻」。11) 滝川政次郎：「上代の隅田川兩岸地帯」，国学院雑誌，56-5，1956.2.1. 12) 柴田孝夫：「東京湾奥の地割について」，新地理，17-1，1969. 13) 貝塚爽平：『東京の自然史』，1964.10.31. 14) 『吾妻鑑』，「新訂増補国史大系 第32巻」。15) 『義経記』，日本文学大系，第13巻。16) 藤原長清撰：『夫木和歌抄』，徳治3(1308)ころ。